

## 梶井基次郎におけるカーニバル文学の芽生え

——絶筆作品「のんきな患者」論——

北野元生

## 〔抄録〕

梶井基次郎はデビュー作の「檸檬」をはじめとする二十篇ほどの作品を残し、昭和七年に三十一歳の若さで肺結核により故郷の大阪で没した。『中央公論』一九三二年一月号に掲載された「のんきな患者」が絶筆作品となった。従来、彼の作風は感覚的・詩人的な側面の強い独自の世界を創り出しているものの、白樺派の影響を強く受けた身辺心境私小説に近いものであった。しかし、絶筆となった「のんきな患者」では事情がやや異なっているようにある。この作品の場合、自らの病状や身辺の出来事から、巷で多くの人々とその家族が自分と同じ肺結核で苦しんでいることに関

心を移し、自らの文学観にも拡がりをもせるに至るのであった。そしてこれまであまり関心のなかった西鶴の作品を丁寧に読み込み、さらに以前から親しんでいたドストエフスキーなどの小説の手法をとりいれ、いわゆるモノトーンな私小説からカーニバル文学への移行が示された作品であると言えよう。

キーワード 身辺心境私小説、ドストエフスキー、西鶴、対話的  
内的独白、カーニバル文学

## A. はじめに

『中央公論』一九三二年（昭和七）年一月号に梶井基次郎の「のんきな患者」<sup>(1)</sup>が掲載された。彼の三十一歳の若すぎる生涯を閉じるまでに、あとわずか三ヶ月もなかった。彼の最期の発表作品となった「のんき

な患者」は、梶井にとっては特別な作品であった。それはどういうことかと言うと、「誰がどうあらうとも僕だけは完全にこの作品群（武蔵野書院から刊行された『創作集・檸檬』<sup>(2)</sup>（一九三二年五月）に搭載されている「檸檬」から「交尾」までの作品十八篇）を踏み越したのです。僕はもう振向かない。」辻野久憲宛書簡（一九三二年五月）<sup>(3)</sup>に、

書き残していることもあり、「のんきな患者」とそれ以前の作品との間にパラダイムチェンジあるいはパラダイムシフトを生じさせたと考える事ができるからである。このシフトすなわち差異性をめぐっての作品論的研究、あるいは作家論的な関心が焦点とされているにも拘らず、未だ十分な検証がなされているとは言えない。

梶井基次郎の文学を論ずる場合、肺結核症（以下、結核と略称する<sup>(4)</sup>）の問題を避けて通ることはできない。そしてこの問題は梶井個人の問題としてのみならず、時代と日本人総体との係わりで考える必要がある。ここではまず、梶井基次郎の結核の進行過程を振り返ってみよう。一九一三年（梶井十二歳の時）、同居していた祖母が結核で死亡したが、その僅か二年後には弟の芳雄が脊椎カリエス（肺結核症と同様に、結核菌の感染で惹起する脊椎骨の結核）で死亡していることから、既にこの頃には梶井も結核に感染していたと考えられる。一九一七年（梶井十六歳）の中学時代に結核の兆候が現れて、欠席が多くなる。京都三高時代も、自堕落な生活とあいまって結核は梶井を苦しめ、二度の留年を余儀なくされた。東京帝国大学に進学した一九二四年には、作品「城のある町にて」に描かれる異母妹の八重子（三歳）が結核性脳膜炎で死亡する。そして梶井自身の病状も悪化し、一九二六年の末に転地療法のため伊豆の湯ヶ島へ向かうことになる。この湯ヶ島での滞在（この時期、川端康成をはじめとする作家等と知己を結ぶ）は、一年五ヶ月間に及ぶ。病状の回復を待たず一九二八年五月に再度上京し友人の下宿を転々とするが毎日のように血痰を見るに及び、志半ばにして同年九月三日に大阪の生家に半強制的に送還される

ことになる。大阪（一時期、兵庫の兄の家）で三年半の闘病生活の後、一九三二年三月に他界する。

作品「のんきな患者」は彼の晩年の大阪時代に書かれた最後の小説となったが、これは結核と言う病氣と彼および市井の庶民との闘いの記録であるとも言える。彼が「のんきな患者」で描こうとした作品は、結核患者にしかわからない患者とその家族の苦悩を徹底した客観描写で表すことであり、その結核患者の眼を通した世間というものを描写することであつたと理解されようし、実際、この作品に登場する人物の全ては主人公を含めて結核患者とその家族に限定されていると言って過言ではない。

梶井の「檸檬」が同人雑誌の『青空』創刊號に発表される当時は三高で留年を繰返していた頃で、既に彼は詩や小説作品の習作を始めていたが、小説については志賀直哉風の文体に拘っていたといふ多くの証言<sup>(5)</sup>がある。一体に彼の小説は、文章が感覚的なものと知的なものが融合した簡潔な描写と詩情豊かな透明な文体、その作風は心境小説に近く風景や自らの身边を題材に日本の自然主義や私小説の影響を強く受けていると感ぜられる。にも拘らず、彼の最終作品となった「のんきな患者」では、梶井は先述の「創作集『檸檬』に搭載されている作品を踏み越えたのです。僕はもう振向かない。」であるとか、「僕は「のんきな患者」で、これまでの自分の文学からは訣別してきた。」などと述べた、その言葉の意味をもっと入念に掘り下げる必要があると考える。

## B. 近年の研究状況

近年の研究状況に関して言うと、相馬康郎<sup>6)</sup>は「梶井がその『神經衰弱』的世界を超越するためにとった方法を、その「暗さ」を究極的にまでつきつめて行く、梶井の言葉で言えば、『憂鬱が完成する地点まで徹底的に下降して行く』と言う方法であった。それが彼の感情の一種の浄化作用が期待される方法であった。『桜の樹の下に』や『闇の絵巻』は、この間の経緯を見事に表現して象徴的な名品となった。その上で、梶井にとつて初めて可能となった『生活への芸術』が小説「のんきな患者」であった<sup>7)</sup>と言う。

「かつての梶井の小説の追及は、己の精神の生き死にを直接問いかけるようなやり方に貫かれていた。「のんきな患者」はそうではない。主人公が傍観者でもあるような地点に立った小説であると言える。」と鈴木貞美は述べている<sup>7)</sup>。

「作者（梶井）は『のんきな患者』の後半部で主人公の吉田が、自分と同じように必死で生きようとする市井の病者の現実を発見する姿を描いた。そしておそらく梶井は市井の病者が生きてゐる現実を認識することで、結核患者である限り自分も、そうした庶民と変わることのない同じ「場」に身を置いていることを改めて知ったのである。つまり梶井は「のんきな患者」を書くことで、庶民の現実をみるとともに自己の「現実」をも見たのだ。梶井は自分の死を半ば覚悟しつつ、なお生を生き切ろうと意志したということである。それが梶井の、結果的には最後の「意志」となった。」とは伊藤史郎の論評である<sup>8)</sup>。

高木利夫は「これまでの梶井の作品が心象風景の描写に傾きがちだったために、眼が内に向いてしまう。それを外へ向けなおそうという主張である。こうして、昭和七年、最後の作品「のんきな患者」が発表された。この作品には主人公吉田以外に、彼の周辺に多くのいわゆる「生活者」が出てくる。従来の、登場人物はほとんど作者梶井を思わせる青年ひとりという作品とは違って、「他者」が導入されたわけである。そのため、閉じられた世界ではなく、開かれた世界が描かれている印象がある<sup>9)</sup>」と述べた。この論は、極めて簡潔にこの作品内容の問題点を指摘していると思われる。

最新の論の一つとして、河原敬子は「のんきな患者」には、大阪の天下茶屋という平俗性に満ちた土地に暮らす梶井が同じ地平に立つて市民を見つめ、そこに病者の普遍的実在を見出そうとする理念が実践されている。「冬の日」「冬の蠅」と同じく結核の病いが重要なモチーフとなっているが、「のんきな患者」には、病者の生き身として肉付けされた主人公の吉田がそこから世間の他者とも関係を持ち、生き抜こうとしている彼らの思いへの認識を重ねる。吉田の「のんき」は、このような死についてのリアリズムを掴み取った人間が求める境地である、とも述べている。梶井の出自である大阪と言う地をはじめて作品に書き残したのは、「のんきな患者」が初めてであり、且つこの作品のみであることを併せて強調している。

以上は総じて、好意的な見方であると言えよう。しかし、一方では、谷彰は「「のんきな患者」は、日常的な時空間を超えた「永遠」を志向することなく、日常の中を水平移動する言語の運動を軸に形成され

ている。「のんきな患者」において作家梶井が試みた転換とは、小説を形成する言語の運動を垂直から水平方向へと転換することにあつたのではないかと思われる。だが、「のんきな患者」がこうした言語のダイナミズムを有する作品として充分に立体化されているかと問えば、残念ながら否と答えざるを得ない。」といささか批判的に論じている。

さらに厳しい見方として、上村武男の論<sup>12</sup>を紹介する。上村は「のんきな患者」はだらけた緊迫感のない文体で構築されている。理屈っぽく、説明口調の長文節をくねくね、ねちねちと、たとえそれが主人公の如何ともしがたい病鬱や爆発寸前の癪癢や、謂れのない不安感を微細に言い伝えるために要請されたものであるにしても、かの「城のある町にて」「冬の日」……などという秀逸な抽象的・詩的散文を表した作家にとつては、大いなる墮落、百歩の後退である」との論を展開する。梶井の透徹した簡潔な文体からの転換を惜しんで言っているのであろう。この論については本稿の主旨ともかわつてくるので、後にまた触れる。

一九二四年、二十一歳になった梶井は第三高等学校の五年目にして特別及第で最終学年の三年級に進級した。既に将来文学で身を立てる決心をしていた梶井は、これまで漱石や白樺派の直哉、武郎、實篤や芭蕉などに親しんでいたが、体調を崩して帰阪して、親元で静養している間に、とくにトルストイ、ドストエフスキー、チェホフ、シング、ニイチェ、ストリンドベリー、藤村、虚子、春夫、敏 را を読んだという。なお、ドストエフスキーへの親和性はことのほか強く、何度か読み直したと言われる。

加えて、のちに彼が「のんきな患者」を執筆する直前頃には西鶴を耽読し、文学への志をいよいよ強くしていったとされている。本稿はその辺りをも鑑みて、今日的な文体検索的な手続きをも取り入れて、とくに作品論的な考究を行うとするものである。

### C. 「のんきな患者」と「檸檬」との比較計量文体学

まず手始めに本稿では、まず梶井のとくにデビュー作品である「檸檬」を取り上げ、絶筆先品である「のんきな患者」との比較計量文体学的解析<sup>13</sup>を介して、どのあたりがどのように変わったのかを明らかにすることによって、その文体学上の意義を考究してみたいと考えている。

解析結果の記載に当り、いくつかについてあらかじめお断りしておきたい。ここでは、段落をもつて始まり次の段落の手前のところまでを「一つの文章」とし、句点から次の句点までの文字の塊を「一つの文」とする。文字数の計測は、あくまで文字（数字を含む）だけを対象とし、句読点や括弧記号など、記号の類は含まない。さらに、統計的数値計算を主体とする計量文体学的解析においては、算用数字を使用する。

#### A. 「檸檬」の計量文体学的分析

本論は同人雑誌の『青空』創刊号一九二五年一月に発表された初出の「檸檬」を底本とするが、一九三一年に武蔵野書院から出版された『檸檬』（創作集）と、現在一般に文庫本などとして出版されている

『檸檬』を参照にした。作品「檸檬」テキストの冒頭の文章は次のようである。原文からの引用文は《》で括弧しておくこととする。以下同様である。

《えたいの知れない不吉な魂が私の心を始終壓へつけてゐた。焦燥と云はうか。嫌悪と云はうか——酒を飲んだあとに宿酔がある様に、酒を飲んでゐると宿酔に相當した時期がやつて来る。それが來たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺炎カタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊を焼く様な借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な魂だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音機を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何か、私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪つ續けてゐる。》（初出誌では、「不吉な魂」であるが、その他の改版本では、「不吉な魂」である——北野注）

これを見ると梶井は彼の文が体言型できちんとして無駄のない簡潔型の透徹した形式を選んで書いた、ないしは書くことと言えよう。加えて、彼自身が「自分の経験したことを表現する文学の正道に沿う」と言っている。これらから、梶井の作品が志賀直哉を中心とする白樺流の私小説的なテキストでその土台が形成されていることが理解される。創作集『檸檬』に収載された小説のほとんど全てが観念的で、心象的且つ透徹したテキストからなっていることにそれなりの理由があると言えよう。

梶井のデビュー作品とも言うべき「檸檬」においては、冒頭からの八つの文章についてを檢索範囲とし、この範囲内では、句点で区切られる文の数は合計57文で、文字数は1985字が使用されている。一文の文字数は短いもので5字、長い文で102字であるが、一文についての平均は34.8字からなっていることになる。また体言は308語、用言は237語が使用されており、用言／体言比は0.77である。用言中形容詞形容動詞は39語で一文につき0.68である。さらに副詞は40語が使用されているが、一文につき0.70であつた。声喩語は0語であり、直喩表現は10ヶ所で使用されている。一文につき0.18ヶ所である。

Ⅰ、「のんきな患者」の計量文体的分析と「檸檬」との比較  
ところが「のんきな患者」において、事情は一変する。彼の最終作品となった「のんきな患者」においては、冒頭の文章は次の通りである。

『中央公論』一九三二年一月号の初出のテキストを底本にすることをお断りしておく。第一章の冒頭の文章をあげる。それは、

《吉田は肺が悪い。寒になつて少し寒い日が來たと思つたら、すぐその翌日から高い熱を出してひどい咳になつてしまつた。胸の臓器を全部押上げて出してしまはうとしてゐるかのやうな咳をする。四五日経つともうすつかり瘦せてしまつた。咳もあまりしない。しかしこれは咳が癒つたのではなくて、咳をするための腹の筋肉がすつかり疲れ切つてしまつたからで、彼等が咳をするのを肯んじなくなつてしまつたかららしい。それにもう一つは心臓が



ひどく弱つてしまつて、一度咳をしてそれを亂してしまふと、それを再び鎮めるまでに非常に苦しい目を見なければならぬ。つまり咳をしなくなつたといふのは、身体が衰弱して初めてのときのやうな元気がなくなつてしまつたからで、それが証拠には今度はだんだん呼吸困難の度を増して浅薄な呼吸を数多くしなければならなくなつて來た。》

である。この冒頭の文章は、『檸檬』の文章とあまり変わらないように見える。つまりここに挙げた文章では、「吉田は肺が悪い。」や「咳もあまりしない。」などに代表されるような短い文が直列に並べられているやうな印象が強い。しかし、説明がややくどくなつたようにも感じる。また注意しておきたいのは、この文章は主人公吉田の内的独白文であり、語り手が吉田の視点に立つてのモノローグ的な文から成り立っている。「のんきな患者」では、しかし、このあとだんだんと饒舌体に変化してゆく。例えば、冒頭の第四番目の文章の後半部には、

《しかし何故不安になつて來るか——もう一つ精密に云ふと——何故不安が不安になつて來るかといふと、これからだんだん人が寝てしまつて醫者へ行つて貰ふといふ事も本當にできなくなるといふことや、そして母親も寝てしまつてあとはただ自分一人が荒涼とした夜の時間のなかへ取残されるといふことや、そして若しその時間の真中でこのえたいのしれない不安の内容が實現するやうな事があればもはや自分はどうすることも出來ないではないかといふやうなことを考へるからで——……「中略」……と胸の中の苦痛をそのまま掴み出して相手に叩きつけたいやうな

癪癪が吉田には起つて來るのだつた。》とあり、これは471字で形成されている一つの文、それかなりの長文である。

冒頭から段落を有する四つの文章は26文の計2089字が使用されており、一文につき、短いもので7字のものもあるが、総じて長くなる傾向があり、長いもので471字であり、その一文平均は78.9字であつた。この数値はStudent-tテストで、『檸檬』との間に明確な有意差を有する。『檸檬』より、「のんきな患者」では明らかに長文化していることは特記されるべきである。さらに、その用言と体言、副詞などの単語を抽出してみよう。結果のみをあげると、体言数は262語、用言数は256語で、用言／体言比は0.98である。『檸檬』における用言／体言比との間にカイ二乗検定で $p=0.05$ と統計学的な有意差が認められる。

用言の中で形容詞＋形容動詞は38語で一文当り平均1.5語である。なお、副詞は49語であつた。声喩語は4語があり、直喩表現は14ヶ所で見られた。これらの数値は一文について換算し、『檸檬』のそれらとカイ二乗検定の結果、数値のすべてについては、『檸檬』のそれらより統計学的に有意に高いことがわかつた。

以上の事実は、すでに岡本恵徳<sup>(14)</sup>によつても指摘されている。岡本は梶井はこの作品で、「詩的散文」から「散文小説」へと文体の変貌を見、その特徴を「論理的分析的に対象にねじれながら迫つて行く文体」「短いセンテンスの積み重ねによる文体ではなく、息の長い屈曲の多い文体」へ変貌したのであると分析している。筆者の今回の比較計量文体学的検索によつて、短い簡潔文からなっている『檸檬』に比

較して、「のんきな患者」においては明らかに長文化し、用言／体言比が高くなり、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、および声喩語や直喩表現の数も一文中の使用頻度は統計学的に有意差をもって増加する。これは、波多野完治によれば、「のんきな患者」を「檸檬」と比較すれば、テキストが説明の多い具体的感性的な文体に変わったということである。

一読すればわかることであるが、「檸檬」ではテキストは抽象的で概念的ともなりやすい漢字の多い語句を並べ、文の字数は小さい。内容的には、主役一人が前面に出て、周囲の他のものたちは背景の風景でしかない。物語の語り手はひとりで勝手にしゃべり、語り手自身を納得させて可しとする内容であるとも取れる。しかし「のんきな患者」においては、いわばこれまで風景に甘んじていた周囲のものたち、例えば主人公の母親なども前面に出て来て、それぞれがその存在を主張しているようである。語り手はそれぞれを語り分けている。各エピソードを読み続けられ、上村が言う通りの用言過多の説明過剰の長文となり、くねくねと曲がりくねった文を編むことになったのはやむをえないことであったことを理解できる。

### D. 「のんきな患者」の梗概——エピソードの列举

この作品は三章からなり、各章は、ほとんど「ある日」「ある晩」で始まるエピソードの積み重ねで構成されている。一章の前半で、病状の悪化とともにどこからくるともしれない不安の原因や不安解消には手段があっても思い通りにはならない苦痛を述べているのであるが、

後半で「そんな或る晩のことだった」で始まる病室に侵入した猫のエピソードが記される。猫に睡眠を邪魔され不安に駆られる話である。第二章は、二週間ほどの苦しみから多少小康が得られると、「ある日」などで始まる五つのエピソードが語られる。それは、1. ヒルカニヤの虎の話、2. 煙草を眺める話、3. 鏡で真冬の庭を見る話、4. 母との渡り鳥問答、5. 末弟が見舞いに来る話である。この最後のエピソードはかなりの分量からなっており、このなかで主人公吉田の身の上が語られる。加えて、以前住んでいた町の荒物屋の娘が肺結核で死んだことが知らされる。

第三章はこの娘の死から、結核で死ぬ人の多いことを知り、さらにはこの病に対する世間の人々の闘う姿を認識することとなる四つのエピソードが語られる。それは、1. 人間の脳味噌の黒焼の話、2. 自殺した男の首吊りの縄の話、3. 仔鼠の黒焼の話、4. 天理教への入信を勧められる話である。そしてこの後に一行の空白の後に、エピソードとして、わが国の統計値を上げ、貧困層における結核の死亡率の高いこと等に言及し、この事象について吉田から二、三のコメントが述べられたところで、本小説はエンディングを迎える。

ここで注意したいのは、第一章の前半は主人公吉田自身の私的な苦しみが続けられるに過ぎない。が、後半は病室に侵入してきた猫によって睡眠が妨げられるのである。吉田は眼前の目障りな猫と、さらに隣室で寝入っていて大事の時には役に立たない母親に対し、憾み辛みを述べているが、その記述が対話的・独白文の傾向を示しているように思える。対話的・独白については、後に述べる。第二章では、母

親との渡り鳥問答をはじめ、弟と母との会話から以前の住まいの近所の荒物屋の娘が結核で死んだこととその家族の話題へと徐々に吉田の関心が自分以外へと向きはじめる。そして第三章に至り、吉田の視線は外界の人々の出来事へと広がり、遂には国民的視野から結核病患者とその家族あるいは世間全体の話題へと拡張伸展してゆく。

次に、注意を向けるべきは、この物語構成が一見して、ブロック方式の挿話連鎖形式が取られており、梶井自身が述べている説話論（後述する）的方法の応用が図られていることである。

第二章の冒頭で吉田がひどく重篤な状況にあった二週間ほどのことを思い出させるほどに、苦しみがそれほど堪えがたいものではなくなった時期に、

《それは「ヒルカニヤの虎」といふ言葉だつた。それは咳の喉を鳴らす音とも聯關があり、それを吉田が観念するのは「俺はヒルカニヤの虎だぞ」といふやうなことを念じるからなのだつたが、一體その「ヒルカニヤの虎」といふものがどんなものであつたか  
吉田はいつも咳のすんだあと妙な気持ちをするのだつた。》

と語る。「ヒルカニヤの虎」はカスピ虎が通称であり、カスピ海の周辺からユーラシア大陸に広く分布していたトラの亜種（学名は *Panthera tigris virgata*）<sup>(15)</sup> の別名である。乱獲で戦後に絶滅した。この短いエピソードは、吉田が頭のどこかにかすかに記憶していたであろう「ヒルカニヤの虎」の名をあげてわが身を奮立たせんと、そのトラとの対話的内的独自の文から成り立っていると取れないこともない。しかし、この辺りまでは基本的には吉田は自分の身の事しか考

えられない「のんきな患者」であり、「のんき振り」を示していると  
言える。

第二章の後半部に至り、結核で寝ていた金物屋の娘が死んだとの噂を母から聞かされた吉田が、その娘の面倒を一人で見ていた娘の聲の母親（お婆さんと呼称）のことについての想い出話を述べる。

《しかしそれは吉田の思ひ過ぎで、それはそのお婆さんが聾で人  
に手眞似をして貰はないと話が通じず、……「中略」……その  
お婆さんも何の気兼ねもなしに近所仲間の仲間入りが出来るので、  
それが飾りのなにもないかうした町の生活の眞實なんだといふこ  
とはいろいろなことを知つてみてはじめて吉田にも會得のゆくこ  
となのだつた。》

これに続けて、このお婆さんが病気の娘を置いたまま、脳溢血で死亡  
してしまつたあとのことであるが、

《吉田はその話には非常にしみじみとしたものを感じて平常のお  
婆さんに對する考へもすつかり變つてしまつたのであるが、吉田  
の母親はまた近所の人の話だと云つて、そのお婆さんの死んだあ  
とは例の親爺さんがお婆さんに代つて娘の面倒をみてやつてゐる  
こと、……「後略」》

と、吉田自身が見聞した事象についての回想文と、母からの伝聞を回  
想する内的独自の文でこのエピソードは終わる。ここに挙げた二つの文  
は240字強、280字強と極めて長い文が使われている。これらの内的独  
白文には、吉田が直接金物屋の家族と会話を介した文は記述されてい  
ないが、金物屋の家族とは対話的でもあり、吉田の意識が自分を含む



自分の家族以外の他者に向けられてきたと言えよう。

第三章も吉田による世間のとくに中下層の人々との対話的内的独白文からなってきたり、四つのエピソードが語られる。このうち、「1. 人間の脳味噌の黒焼」のエピソードは興味深い事象が語られる。これについては項を改める。

市井の人々が、結核との関わり合いを通して、大都会大阪で当時発展し始めていた郊外地にその場を借りて、街中の中下層の人々がいかに健気に結核と戦っているかを、また一生懸命な世の中というものに共感し、それらを肯定的にとらえようという姿勢を示すなど、これまでは自分の事しか考えられなかった、のんきとも言える吉田の変貌した姿がそこにあるのである。

梶井の視点が自分以外の世間という社会に向いたことと関連するよう、梶井の言う西鶴の説話様式と恐らく三高時代に読みふけていたというドストエフスキーのポリフォニックな文学的作法を使って、これまで梶井が拘っていたモノローグ的文学様式からポリフォニックな文学、さらにはカーニバル文学への脱却を図ったといえるのではないか。

## E. 「対話的内的独白」とドストエフスキー、そして西鶴

鈴木貞美あるいは大谷晃一、さらに多くの評者らは、梶井が三高時代や東大時代にドストエフスキーの作品を耽読していたことを述べているが、その意義については、評者らはこれまで触れることはなかつ

た。ミハイル・バフチン<sup>(16)</sup>はドストエフスキーの研究者として著名であり、一九六三年に『ドストエフスキーの詩学』の決定稿を出版した。彼の論で重要なことはこの一点。即ち思考する人間の意識とその意識の対話的存在圏とを、その深遠と特性を全て包含した形で解明することは、モノローグ的な芸術的アプローチでは不可能である。それらはドストエフスキー的なポリフォニー小説において初めて、真に芸術的な描写の対象となり得たのである。現在ドストエフスキーの作品は、サマセット・モーム<sup>(17)</sup>によれば、恐らく世界で最も影響力のある作品の手の一つとなっていると言う。

ここで言うモノローグな作品とは、例えばわが国のいわゆる身辺心境私小説がその好例である。多くの場合は作者を体現するような主人公の一人勝手な思维思想による内的独白文でなりたっているものが多く、いわゆる志賀直哉らの白樺派の多くの作品がこれに該当する。さらに付け加えるならば、芭蕉の俳句作品の多くはこの範疇に属すると筆者は考えている。

「対話的内的独白」とはバフチンが「ドストエフスキーの詩学」で述べた文学的学術用語である。バフチンはこの書の中で、ドストエフスキーの作品の多くがポリフォニックであり、カーニバル文学的であることを指摘した。ポリフォニックとは煎じ詰めれば、例えば主人公一人の単一の見聞だけではなく、多数の人々の意見を取り入れる重要性を説いたものである。モノローグよりダイアローグあるいはポリフォニーの手法を取り入れることにより、文芸作品の厚みが倍加することを述べているのである。細部の説明は省くが、バフチンはポリ

フォニー文学のより特殊に発達させた小説作品をカーニバル小説と命名した。かかる小説作品の中で、例えば、そのある一定の場面での登場人物の主人公が一人で思惟思考する場面も少なくないはずである。この場合の内的独白の内容が対話的であることの重要性はこの上なく大きなものであると説いているのである。

この対話的内的独白とは、例えば主人公は個として自らの内的法則性だけによって生きるのではなく、社会あるいは市井から受ける、逃れることのできない局限にどう対応し、その事を通して、社会状況にどう対処するか的外的法則性によって限定される存在であることを、認識せざるを得ないことの表徴であると考えることができる。煎じ詰めれば、ヒトは独りで生きているのではないし、独りでは生きて行けないのであるから、内的独白と言う極めて個人的・私的な行動も、ほとんど常に他者との関係を前提にしているはずである。梶井は市井の中下層の人々の生の諸相を動態としてとらえ、それを人々の共同体としての時空間の総体を丁寧な内的独白を主たる様式である本作品に取り入れた。これは梶井がこの「のんきな患者」を執筆している将にその間に目覚めたという次に述べる西鶴の手法やドストエフスキーらの発想をわが物として取り込もうとした決意の方法であったと考えることができる。

梶井が「のんきな患者」の第二章と第三章で述べたことは、世俗社会に住む人間の無知から来る無法や悪やユーモアを見きわめ、それを中下層の人々の愚昧に仮託した。これを西鶴の説話と同類であると論じることは充分可能である。水田潤や有働裕、森山重雄らの論を参考

にすれば、西鶴の説話文学には中世の説話ではない近世的説話であり、いかに民間伝承的発想と複合させているか、庶民感覚との平衡を保たせているか、ということに重点があるとされる。そして西鶴の民衆への回帰、伝承の形式を通した新しい造形であるという点がさらに強調されたとする水田の論には興味深いものがある。梶井が「のんきな患者」を書き始める直前ごろから西鶴をしきりに読んでいたのはあまり世間に知られていない事実である。一九三〇年三月付けの北川冬彦宛書簡の中で、「僕はキミが小説を書くのは大賛成だ。……『中略』……。僕の一つ思ふことは 小説は何しろ説話が元だから……『中略』…… 何しろ説話といふ奴はうまく使はなければ樂でないし 小説の「スワリ」も出ないやうに思ふ。／君が五枚十枚二十枚の散文詩風のものから書いてゆかうといふことは それ自身として非常にいい試みとは思ふが、それとは別に、この説話論をうけ入れてくれることを願ふ」と書いている。この書簡文中の説話や説話論という語彙はその頃読んでいた西鶴の説話様式の謂であることは当然である。

ドストエフスキーや西鶴の手法を採り込んで、日常の行為は言語に短絡させて、物質的状况を可逆的に生きる庶民の生を直視する。つまり、通俗の現象は事態に取材し、それを媒体として、そこに示された一般庶民の人間の普遍を、即物的に形象化するのであると論述してきたが、梶井が一般庶民の人々の営みを後述するようにカーニバル化して文芸作品に仕上げようと試みたというのは、良く首肯できるのではないか。その論証の一例として、次項では「人の脳味噌の黒焼」のテーマで繰り広げられる第三章の中の最初のエピソードを取り上げて

みよう。

## F. カーニバル文学の芽生えを示す「ヒトの脳味噌の黒焼」のエピソード

この「ヒトの脳味噌の黒焼」<sup>(19)</sup>のエピソードは本物語中の第三章の最初に出てくる。この小話の情景を平面的シーンとして考えてみよう。この部分ではまず青物売りの女が物語の基点であると仮定すると、①青物売りの女の弟が結核で死ぬ。そこに寺の和尚が登場するが、火葬場で焼き上がった弟の頭蓋骨から脳味噌を刮ぎ出して、姉にこう言うのである。

《人間の脳味噌の黒焼はこの病氣の薬だから、あなたも人助けだからこの黒焼を持つてゐて、若しこの病氣で悪い人に會つたら願けて上げなさい》

②その女に市場の路上で出会った吉田の母は、ヒトの脳味噌の黒焼を願けて貰うのであった。母は女に息子の吉田の結核のことをその概要の幾ばくかを、その折に訴えたはずである。

③吉田が帰省した折に母親からこれを飲むようにと勧められる状況が述べられる。

《(東京から) 休暇で歸つて來て忽々吉田は自分の母親から人間の脳味噌の黒焼を飲んで見ないかと云はれて非常に嫌な氣持になつたことがあつた。吉田は母親がおおづでもない一種變な口調で云ひ出したとき、一體それが本氣なのかどうなのか、何度も母親の顔を見返すほど妙な氣持になつた。それは吉田が自分の母親が

これまで滅多にそんなことを云ふ人間ではなかつたことを信じてゐたからで、その母親が今そんなことを云ひ出してゐるかと思ふと何となく妙な頼りないやうな氣持になつて來るのだつた。》

と、母親から人間の臓器の黒焼を飲んで見ないかと言われて、吉田は黒焼に対して單純に生理的に嫌な氣持ちであると説明がされている。これを聞いた吉田はそんな母親を頼りないと思うばかりである。

④そして、この小話の大団円とも言うべき最後の状況であるが、

《傍にきいてゐる吉田の末の弟も／「お母さん、もう今度からそんなこと云ふのん嫌でつせ」／と云つたので何だか事件が滑稽になつて來て、それはそのままに覺がついてしまつたのだつた。》

(傍点は論者による)

と、西鶴張りの滑稽譚に終わらせようとする梶井の作意が見えるようでもあるが、「事件」という法律用語であるとも考えられる語句がここで用いられている所に、何か含みを残しているにも感じられる。

以上のエピソードとしての物語を離れ、作者梶井の立場から考察してみると、そこに梶井の何らかの意図があつたと考えることができないか。ミハイル・バフチンによれば、ドストエフスキーは特殊なプロット設定の中で社会的構造とそれにまつわる形式を取り払い、自由で無遠慮な人間同士の接触が力を持つように仕向けているという。バフチンはドストエフスキーの芸術理念と、作品制作上の創作姿勢と創作方法の特徴を説明するに当たり、『カーニバル文学』という独特な概念を前面に押し出したのである。ドストエフスキーはいつでも最も異常な現実を取り上げ、主人公を外部的、あるいは心理的に最も異

常な状況下に置き、そしてすさまじい洞察力と驚くべき確さで、その主人公の精神状態を物語るのだと、締めくくっている。

その結果、カーニバルにおけるちぐはぐなヒト同士の組み合わせが見られることとなる。自由で無遠慮な関係は価値、思想、現象、事物の全てに及ぶ。カーニバルは聖なものと冒瀆的なもの、高いものと低いもの、偉大なものと下らぬもの、賢いものと愚かなものなどを近づけ、まとめ、手を取り合わせ、結合されるのであるという。

本作品「のんきな患者」のこの小さなエピソードのなかで、①聖なる、そして賢明なはずの寺の僧が、最も愚かな俗説を信じてそれを振り回して、人体の死体・遺骨・遺髪・納棺物を損壊・遺棄・領得するという死者の尊厳性を最も損なう行為を率先して行うなどの異常事態。一方でそれを了とする社会意識の異常さについての認識が欠如している死者の家族の女との、火葬場という密室化して閉ざされた上記①の社会空間での会話の展開。②次に、農村の青物の生産・販売者であった女と、都市の消費者・顧客としての吉田の母が開放された市場の路上で行った屍体損壊物（人肉）の授受。③さらに、普段はしっかり者の母は他人の言い分をただ受け売りして、家庭という密室の中で、吉田に食人行為への参加を督励する。であるが、吉田は、その話を聞いただけで嫌悪感を覚える。黒焼にされているヒトの屍体のごくごく一部とは言えども、それを口にする勇氣はない。それを勧める母親を改めて頼りないと感じるだけである。③の最後には、その場では年齢的に一番若い吉田の末弟が、一番年配で尊ばなければならないはずの母親をあたかも教師が生徒を諭し宥めるようにして、その場を収めるこ

ととなる。

このエピソード①②③の全体が一つの時刻帯の一つの場所で行ったものではない。しかしエピソード全体が一幕ものの演劇を観劇しているような錯覚を覚えさせてくれる。それは西鶴の説話方式で話を振り分けているからである。このエピソードを含め、本作品中の各エピソードにおける登場人物は決して多くはないし、舞台も限られたものである。とはいえ登場人物は複数であり、聖と俗、賢と愚、長と幼、売り手と買い手、男と女という諸レベルでの混交を通して、社会の規範を相対化し、屍体損壊と食人というような極限状況の中での思想を試みているのであるとも言える。一般的な外部の生活では万能の社会的ヒエラルヒーとは対立する、常軌を逸した場違いの、人間の相関関係の新しい様態が作り出されていると言えよう。カーニバルにおけるちぐはぐな組み合わせによるお互いの無遠慮な接触を示しているのである。

余談であるが、このエピソードの中には、食人（カニバリズム、人間が人間の肉を食べる行動）についての哲学的、宗教的、法律的、倫理的、文学上の思想的概念にまでには、話題を伸長発展させていない。この掘り下げが十分ではないことで、不満と考える読者も少なくないはずである。しかし、梶井が思想を二の次に置いてこのようなエピソードを開陳したのは、身辺心境私小説の領域からの脱出を試みるため、西鶴の説話様式とドストエフスキーばりのポリフォニー的小説技法を取り入れることによって、それを図ることに最大の努力を試みたのであると説明することは一定の説得力を持つていると考えられる。



とは言うものの、作者梶井の本作品における「カーニバル化」が全篇に亘って必ずしも十分な成功点に達しているとは言えないかも知れない。

梶井の「のんきな患者」に登場する結核患者の大多数は下町の中下層の階級に属する庶民である。第二章の金物屋の娘とその家族の話、第三章での人間の黒焼きの脳味噌を飲めと勧められた話、肺病と借金とに苦しんだ挙句首を溢って死んだ奈良の男の首溢りの縄を嚙んで見ると勧められた話、仔鼠の黒焼を飲めと病院の付添婦にすすめられた話、最後には、天理教の教会の女が病気の快癒利益を説き、彼女に信仰を強要される話などから、吉田は自分の思っているよりはるかに現実的なそして一生懸命な世の中というものを感じたのであった。

そして最後の締めくくりに、唐突にはあるが、肺結核による死亡率を100とすればと、わが国の結核病患者の統計の話にきりかわるのである。当時は結核病は日本のみならず全世界的に猖獗を極めていた疾患であり、とくに明治維新を経て、日本は殖産興国と富国強兵を国是としなければならなかった。保養と滋養とが肺結核の治療法のほとんどすべてとしか考えられなかったこの時代の趨勢で、わが国の現状では、結核対策を為政者がどれだけ考えていたとしても、国力としてこちらに手を差し出すことはかなり困難であつたろう。従って貧困者ほど、結核の死亡率は高かったのである。事実抗結核治療薬として抗生物質のストレプトマイシンが米国で発見されたのが一九四三年であり、これが対結核治療薬として一般に認められ、戦後わが国でストレプトマイシンほか一般に回回り始めたのが一九五〇年代に入ってからで

あるから、結核に対する対処はそれまで待たなければならなかった。では、梶井は何をこの作品で表現したかったのであるうか。表題の「のんきな患者」の「のんき」とは何を意味しているのだろうか。再掲であるが、この作品の冒頭部を再掲すれば、

《吉田は肺が悪い。寒になつて少し寒い日が來たと思つたら、すぐその翌日から高い熱を出してひどい咳になつてしまつた。……

#### 〔略〕

と、梶井の初早期の、例えば「檸檬」の文章と殆んど何ら変わる所がない。すなわち吉田が社会における肺結核患者の存在やその位置に対して全く無頓着であつた往時の梶井の姿である。いわば往時の彼の作品の多くは梶井基次郎個人だけの身辺心境の姿であつた。しかし、この作品「のんきな患者」に着手した梶井には自己の相対化、客観視の作業を経たのか、もはや幻視や錯覚はなかった。作者と語り手と登場人物が一定の距離間を保っているとは言え、存在するのは主人公の眼前の現実であり、結核という病いにもがき苦しんでいる患者とその家族・市井の人々の姿であつた。もがき苦しんでいる市井の人々の一人として吉田があり、彼の母親を含む家族があることに気づき、それを第三者の語り手に語らせることで作品が出来上がったのである。そこで、西鶴の説話様式の手法を取り込んで、あるいはさらにはドストエフスキー式にカーニバル文学化しつつ、市井の人々の様々な姿を取り入れて、自分と自分以外にも多くの患者とその家族が苦しみ呻いていることを活写したのである。はじめは「のんきな患者」であつた吉田、すなわち作者の梶井が、かくして、本作品のエピローグの部で更に一



歩進んで、数値を含む国家単位での内容事項にいたるのである。自分や自分の見聞きした範囲の人々の描写のみではやはり充分に市井の患者を網羅できないことは百も承知ではあったろうけれど、とにかくもっと広い世間を、あるいは人々の社会を作品の内部に取り入れたいと意図したのであると考えるのはうがち過ぎではないと考える。

以上をまとめると、上村武男の批判に答えを見出すのは、それほど困難ではないのかも知れない。梶井が意識してモノローグな私小説様式をポリフォニックな小説形式に改める目的で、個人的な単なる内的独白の様式を対話的内的独白の形式に改め、さらにはカーニバル小説への脱却を図り、庶民社会で苦しみに耐えている人びとに共感するような作品を描くために、具体的感覚的なくねくね、ねちねちと饒舌体の文をことさら選択して編んだのであり、これは従来簡潔で詩情豊かとも言える彼自身の持ち味である透明な文体を犠牲にした梶井の必死の努力の結果であつたはずである。

横光利一が<sup>(20)</sup>「梶井氏の文学は、日本文学から世界文学にかかつてある僅かの橋のうちのその一つで、それも腐り落ちる憂いのない勁力のものだと思ふ。眞に遅い文学だと思ふ。」とコメントしたことの意味は、梶井の本作品の地平に、ドストエフスキーと西鶴とを結び付けて置いて考えると、とてつもなく大きい。

## G. まとめ

梶井基次郎の「のんきな患者」を題材に選んで、その計量文体学的、カーニバル文学化の試み、西鶴の説話様式の取り込みなどを中心に文

体学的特徴について分析した。その結果、次のような結論を得ることとなった。

1. 計量文体学的検索には、とくに梶井のデビュー作品である「檸檬」を取り上げて、これと彼の最後の作品である「のんきな患者」との差異を分析した。そして、「檸檬」では用言・体言比の小さい、即ち体言型の、そして短小の文が、直列的に並べられた文章からなっていることが分った。これに対して、「のんきな患者」では長大で用言・体言比の大きい、即ち用言型の文が、かなり錯綜した様式を示している長文型であることが分った。この事からは、「のんきな患者」ではより感覚的・説明的・具体的な文章へと変貌したことが分る。

2. 重症の肺結核に悩む主人公が述べる内的独白文がテキスト中に多いのは作者梶井の従来の作品とあまり変わりがないようである。作品の冒頭部では、この内的独白は私的にこもったもので従来のそれとは変わらない。しかし、徐々に対話的内的独白文に変わってくる傾向を示す。すなわち、母親をはじめ周囲のひとびとの存在とその思考の在りようが主人公の脳裡にのぼってくるからである。このことは主人公はいつも、周囲の人々のことに気配り・目配りをしているということを示す。梶井がこの作品を通して、自分一人の世界にこもることはなく、広く社会に目を向け始めはじめたのであろうと考える事ができる。すなわちポリフォニー文学に目覚めたと言えよう。

3. ポリフォニー文学のある一定の集大成としてはカーニバル文学がある。テキストは多くの市井の庶民を中心としたエピソードから成り立っているが、その多くにバフチンの謂うカーニバル文学への芽生

えがあると考えることができる。これは彼がまだ小説を書き始めたかどうかの頃から、ドストエフスキーをはじめ欧米の小説作品を読みふけていたことの影響が大きい。本作品中の一部はカーニバル化に確かに成功しているようにみえるものの、全体としては芽生えの状況であるといえる。この彼の試みはその後も継続する筈であつたに違いない。しかし肺結核は彼のこの世での在籍をモはや許さなかつたのである。

4. 梶井が西鶴文学に目覚めたのは、この作品の制作に着手するかどうかの時期であつたようである。実際、西鶴文学から多大の影響を受けていたことは彼の書簡などから垣間見られる。本作品では中下層の庶民の肺結核患者についての多くのエピソードを並べているのであるが、西鶴の「諸国ばなし」など、説話物語の影響を無視することは出来ないであろう（本稿では西鶴文学についての詳細な論評は避け、他に譲った）。

5. 表題の「のんきな患者」の「のんき」とは、これまで梶井自身が個人にこもった身辺心境私小説とも言ふべき作品を好んで描いていたことと無縁ではない。周囲の社会の状況を広く見渡せば、結核と言う病気で苦しんでいる人々の多さと、梶井自身もその一員であることを発見した驚きを込めて、これまでの自分ののんきさ加減を自嘲し、反省の故に自戒を込めてこの題名を付けたのであると考えたい。

## 〔注〕

（1）梶井基次郎「のんきな患者」、『中央公論』一九三二年一月号（初出）。

三好達治編集『城のある町にて』（創元選書33、創元社、一九三九年十一月）に初収。

（2）梶井基次郎「檸檬」、『青空』創刊号、一九二五年一月（初出）。梶井基次郎『檸檬』（創作集、武蔵野書院、一九三二年五月）に初収。

（3）本文中引用した梶井の書簡文については、梶井基次郎『梶井基次郎全集』別巻（筑摩書房、二〇〇〇年九月）からの引用である。

（4）福田真人『結核の文化史——近代日本における病のイメージ』、名古屋大学出版会、一九九五年二月。

（5）梶井の評伝については、とくに大谷晃一『評伝梶井基次郎』（河出書房新社、一九八九年四月）、および鈴木貞美の書（注（7））を参考にした。

（6）相馬康郎「解説・梶井基次郎——人と作品」、『檸檬』（角川文庫版）、角川書店、一九六九年十一月。

（7）鈴木貞美『梶井基次郎表現する魂』、新潮社、一九九六年三月。

（8）伊藤央郎「梶井基次郎『のんきな患者』」、『日本文学誌要』五十八、一九九八年七月。

（9）高木利夫「梶井基次郎の二重性」、『法政大学教養部紀要』三十七、一九八一年二月。

（10）河原敬子「梶井基次郎『のんきな患者』——リアリズム文学への新たな志向」、『人間文化研究科年報』二十六、二〇一一年三月。

（11）谷彰「梶井基次郎『のんきな患者』論——身体と他者をめぐる物語——」、『国文学攷』一二四、一九八九年十二月。

（12）上村武男『梶井基次郎——落日の比喩』（大阪文学叢書1）、編集工房ノア、一九八八年一月。

（13）本稿では、波多野完治が開発した、文章心理学的分析法（比較計量文体的分析法）の方法に、統計処理に応用される数学的処理を追加して用いている。分析方法は波多野の他にもいくつか開発されている。それぞれに一長一短がある。しかし、波多野の方法は比較的簡便で直截である。その分、数値の取り扱いに関しては正確性に富んでいると言える。以下を参照されたい。波多野完治『文章心理学入門』（小学

- 館、一九八八年十二月）、および、全・『波多野完治全集（第一巻「文章心理学」、小学館、一九九〇年七月）。
- (14) 岡本恵徳「『のんきな患者』論」、『琉球大学文学部紀要』十一、一九六七年三月。
- (15) 「ヒルカニヤの虎」については、ウィキペディア (<https://ja.wikipedia.org/wiki/カスピトラ>) にもその説明が詳しい。これは一九七〇年代に絶滅したトラの亜種であるカスピトラの別称である。これについては、多くの『動物図鑑』や『絶滅動物図鑑』などでも調べることができる。
- (16) ミハイル・バフチン著、望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』、ちくま学芸文庫、一九九五年三月、（原著は、M. M. Bakhtin, *Problemy poetiki Dostoevskogo*, Изд. 2-е. Москва, 1963）。
- (17) サマセット・モーム著、西川正身訳『世界の十大小説』（下）、岩波文庫、一九九一年十月。（原著は W. Somerset Maugham, *Ten Novels and Their Authors*, 1945 The Royal Literary Fund c/o A. P. Watt Limited, London, 1945）。
- (18) 井原西鶴論については以下を参考にした。織田作之助「西鶴新論」（修文館、一九四二年七月）、水田潤『西鶴論序説』（桜楓社、一九七三年五月）、有働裕『西鶴諸国はなし』論序説（愛知教育大学研究報告『四十五、一九九六年三月）、森山重雄「咄の伝統と西鶴」（『封建庶民文学の研究』、三一書房、一九六〇年）、など。
- (19) わが国の風土としては、もともと屍体損壊や食人肉に対してはタブー視する傾向が強かったが、医療目的の食人肉の風習は古来から日本の各地で行われていたようである。とくに結核、癩、梅毒や精神・神経疾患などに対する特効薬のなかった時代には、人肉を得るために墓を暴いて屍体を取り出す事例や極端な場合は殺人に及ぶことがあった。梶井の存命時の一九二九年十一月の新聞記事に、共同墓地を発掘し、屍体から脳や骨を抜き取って黒焼きにして、肺病その他難病の良薬・特効薬と称して、近隣の主婦らに二十円から三十円で売りさばっていた男が逮捕されたとの記事が出た。詳しくは、吉岡郁夫の論、「医療
- としての食人」（『比較民俗研究——日本と中国の比較——』五、一九九二年三月）にその記載がある。筆者はこの新聞記事については未確認であるが、梶井が直接この記事を読んで、「のんきな患者」のエピソードに利用した可能性は高いと考えている。
- (20) 横光利一の「梶井氏の作品」と題する小文が『梶井基次郎全集』別巻（注（3）と同じ）の三四三頁に記されている。この小文は、他に『横光利一全集』（河出書房新社、一九八一年六月）にも、記録されている。
- （きたの もとお 文学研究科日本文学専攻博士後期課程満期退学）  
（指導教員：三谷 憲正 教授）  
二〇一八年十月三日受理